この島からつながる平和の心

沖縄県立那覇国際高等学校二年 糸満 愛莉

私は中学生のとき、海外研修でハワイを訪れた。青く広がる海、照りつける太陽、どこか沖縄に似たその島で、私はある場所を訪れた。パールハーバー、真珠湾。太平洋戦争の始まりの地とされる場所だ。静かな海上に建つアリゾナ記念館。その中には今も沈んだままの戦艦と、そこに残り残された千人以上の命が眠っている。展示室では、当時の新聞や写真、戦死した兵士の遺品が並んでいた。そこには「攻撃されたアメリカ」という視点で語られる真実の物語があった。家族を失った人々の言葉、悲しみに沈む表情。私はその場に立ち尽くし、「沖縄で学んできた戦争」との違いに大きな衝撃を受けた。パールハーバーでは「攻撃された側」の苦しみ語られていたのだ。

沖縄では、戦争は「襲われた悲劇」として語られる。沖縄戦は非戦闘員である一般住民を巻き込んだ激しい地上戦が行われた。多くの命が無惨に奪われ、深く大きな傷がこの地に刻み込まれた。沖縄県平和祈念資料館にある一枚の大きな写真の前で、私は戦争とは何かを知った。小さな男の子が焼け果てた地ではだかだか立っている。逃げまどう中で親とはぐれ、あるいはこの子だけが激しい砲弾をのがれ、とり残されたのだろうか。どうすることもできず震える眼差しが頭から離れない。

どちらも戦争によって多くの尊い命が失われた事実。しかし立場が変われば、認識の仕方が変わる。私は初めて、自分の知っている歴史だけでは世界について理解はできないのだと実感した。だからこそ、私はこう思う。戦争は決して許されるものではない。そこにあるのは、奪われた命、壊された日常、取り戻せない悲しみだけだ。正義も、勝利も、どんな理由も、命の重さにはかなわない。戦争は、どこから始まったとしても、誰が起こしても、絶対にしてはいけないのだ。

そして、沖縄の今を見つめるとき、私は戦争が「過去の話」ではないことを感じる。私たちの島には、今も多くの米軍基地が存在する。学校の授業中でさえ、ヘリの音は響き、時には先生の声が聞こえなくなる。一日に何度、授業は中断を余儀なくされる

だろうか。今もこの島に残るたくさんの方々の不発弾。なくならない米軍関係者によって引き起こされる事件、事故。そしてそれを隠そうとする力。これが「平和な日常」と言えるだろうか。ハワイで出会った人々の中には、日本や沖縄に対して温かい気持ちを持ち、歴史を学ぼうとしている人たちもいた。ある現地ガイドがこう言ってくれた。「祖父はパールハーバーで亡くなった。でも今の私は、日本の学生と未来を語れる。それが希望だよ。」と。その言葉に私は心を打たれた。過去の事実を変えることはできない。しかし、理想の未来は私たちの手でつくることができる。私は沖縄に生まれ育ち、この地の痛みと向き合いながら、育ってきた。そして、パールハーバーで「別の視点」を知ったことで、より深く「平和とは何か」を考えるようになった。だからこそ、私はここで強く誓いたい。この島を、二度と戦場にしてはならない。命が踏みじられる場所にしてはならない。沖縄の青い空の下で、子どもたちが笑い、お年寄りが安心して暮らせる社会。そんな日常こそが、守るべき「平和」だと思う。

今この瞬間も、世界では戦争や紛争が続く、子どもたちが学校にも通えず、家族を失っている現実がある。中東、アフリカ、ヨーロッパの一部では、人々が平和を求めて声をあげても、銃声がかき消してしまふ。それでも、国境を越えて支援を届ける人たちや、対話を重ねる国際機関があることも知った。平和を守る努力は、この情報があふれる現代でも世界中に存在している。沖縄のような小さな島からでも、その輪に加わることはできるはずだ。平和は「当たり前」ではなく、「つくり続けるもの」。私はその一歩を、自分の言葉から始めたい。

平和とは、ただ戦争がない状態ではない。誰もが恐れることなく暮らせること。過去の痛みを繰り返さないこと。そして、互いの違いを理解し、受け入れること。沖縄の歴史も、今世界で苦しむ人々の現実も、すべて私たちにとって学ぶべき「今の平和の課題」だ。遠い国の出来事を「関係ない」と切り離すのではなく、「同じ地球に生きる人のこと」として感じ、考え続けること。小さくても私たちには未来がある。どんな小さな声でも、沖縄の平和を願う心は、同じく平和をめざす人々の心に届き、つながることができる。それが争いのない世界をつくる一歩になると信じている。